

序

門林 岳史

本論文集は、2004年度のUTCPCの研究活動の一環として組織された研究会「身体的思考・感覚の論理」の成果をもとに編まれている。分析哲学、フランス現代思想、メディア論、映画研究など様々なバックグラウンドから集まった若手研究者で構成されたこの研究会で、私たちは異例と言ってよいほどの密度で、そして多様なアプローチから、身体と感覚をめぐる哲学的思考の批判的検討という共同研究テーマに取り組み続けた¹。少人数の研究会での綿密な議論と、その成果を公にしたワークショップを経たうえで編まれたこの論集も、それぞれが様々な対象に様々な方法論で取り組みつつも、全体として一つの哲学的問題を構成しえたと自負している。そこでここに簡単なながら、収録された論文群が織りなす問題領域の一つの可能な議論の線として描き出してみたい。

冒頭の二論文、鈴木貴之「身体は心について何を教えてくれるのか」と荒谷大輔「認識論と存在論の交錯——ギブソンの生態学的心理学の哲学的考察」は、いずれも、J・J・ギブソンの生態心理学に代表される、心身問題に対する新しいアプローチを主題としている。まず、鈴木論文は、神経生理学や計算機科学の発展に基礎づけられた表象主義の立場から、ギブソンやヴァレラに代表されるいわゆる「身体化された心」の立場を批判的に検討する。その結果、まず第一に、そうした新しいアプローチが提唱する考えのうち多くは、それらが批判的としている表象主義の立場と両立可能であることが確認される。そしてその上で、表象主義と両立不可能な「身体化された心」のラディカルな帰結は、今の段階では具体的な説明能力を欠いていると批判する。鈴木自身が強調しているように、こうした古典的な立場からの批判的検討は、新しい立場がいったいどのような点において新しいのかをはっきりさせる上で極めて有益である。旧来の立場に対する明白な敵意のもとで提唱されている新しいアプローチも、こうした検証を経ることなしには、ともすれば新しい意匠を借りて同じことを繰り返しているだけにもなりかねないのである。

続く荒谷論文もまた、この点において同じ関心を共有している。ただし、荒谷がここで持ち出すのは認識論と存在論というさらに古い哲学の問題であり、それに生態心理学がどのような答えを出しているかが俎上に乗せられることになる。これに対する荒谷の回答は悲観的なものである。すなわち、生態心理学が提唱しているとされる旧来の認識論を乗り越える新たな実在論は、結局のところ近代以降の哲学が批判してきたはずの本質主義への回帰であり、そうした嫌疑から免れるためにギブソニアンたちはご都合主義的に認識論と存在論のダブルスタンダードを使い分けているだけではないか、と荒谷は説くのだ。しかし、そのように古典的な哲学の問題構成の土俵に引きづり込むことで新しい立場を批判することがもたらす閉塞状況に対して荒谷は無自覚なわけではなく、自身はあくまで伝統的な哲学の枠組みにとどまりながら、生態心理学がそこにもたらしうる新たな可能性を内在的に考察することになるだろう²。

さて、以上の論考が示唆しているのは、身体についての哲学的言説をその歴史の厚みのなかで再考することの必要性である。身体という対象に哲学的言語がどのようにアプローチすることが可能なのかをはっきり限界確定するためには、そもそも「身体哲学」という言説が孕んでいる歴史性、そしてひいてはその政治性を視座からはずすわけにはいかないのだ。続く横山太郎「日本の身体論の形成——『京都学派』を中心として」がこの問題に正面から取り組むことになる。荒谷の論考が新

たな視座を偽装しつつ再導入される本質主義の批判へと向けられていたとするならば、ここで横山が問題に付すのは逆に、本質主義的態度が「日本的身体」なるものを廻行的、再帰的に発見しなおし、その結果、「日本的身体」の伝統が古来から脈々と続いてきたという印象が生み出される、という事態である。こうした問題を具体的に検証すべく、横山は、西田幾多郎と田辺元を中心に京都学派の哲学者たちが戦わせた論争を分析し、そこにおいて彼らが現象学やマルクス主義といった西洋思想との格闘を通して独自の身体論を構築していくさまを跡づけるとともに、それが本質主義へと転落する危険性を指摘することになる。

これら三本の論考がそれぞれ別の角度から身体についての哲学的問題に取り組むなかで浮かび上がってくるのは、20世紀の哲学が身体を新たなトポスとして発見していくさまである。しかし、「身体の哲学」というこの問題構成には、なにか人を当惑させるものがないだろうか。というのも、「身体」というこの生々しい現前に何らかの概念規定を与えることができるとするならば、それはまずもって、抽象的な思考作用をどこまでも逃れるものとしてであるに違いないからだ。この語義矛盾、どこまでも包摂と全体化を拒む身体の側面に呼応し、そこへ向けて逃走線を描き出す一つの方策が、「感覚」という離散的な経験の相から身体に迫ろうとするアプローチである。後半三論文が、三人の思想家のテキストの具体的な読解を通して、この問題に取り組むことになる³。

まず、拙稿「触覚、この余計なもの——マクルーハンにおける感覚の修辞学」は、「身体」を言説性において捉えようとする横山の試みを引き継ぎながら、感覚性の問題を、その比喩形象における配分のエコノミーの観点から考察している。マクルーハンのテキストを感性論として理論的に再構成した際に、視覚／聴覚というその理論の二項的な配分を動揺させる「余計なもの」として「触覚」という比喩形象は登場する。こうした問題意識を出発点としながら私が示そうと試みたのは、アリストテレスにまで遡る感覚についての言説の歴史の厚みと、そのなかで浮かび上がってくる感覚の問題のアクチュアリティである。

続く竹峰義和「映画のなかの自然美——後期アドルノの映画美学における知覚の問題」も、技術の発達とメディアの社会への浸透と相即するかたちで展開された思考を、しかしながらあくまで言説の水準にとどまりながら読解する点において、拙論と問題構成を共有している。竹峰は、アドルノが晩年のテキストで考察する映画体験における知覚形式に着目し、そこにおいてアドルノが「文化産業」の名のもとに大衆文化を一刀両断に切り捨てるといったクリシェとなったアドルノ像をくつがえす思索を紡いでいるさまを描き出している。注目すべきは、そこでアドルノが、映画鑑賞という現代的な知覚体験に、その移ろいやすさにおいて「自然美」の経験と通呈するものを見出している点である。新しい経験がその形式において経験の古層と一致するというこの事態、それは、マクルーハンが新たな経験を形容した「触覚」という比喩形象にも共通するプロブレマティックであった。

さて、感覚という問題構成は確かに「身体の哲学」の孕む本質主義からの一つの逃走線を描き出しているが、しかし、そこにもまた落とし穴がないわけではないだろう。最後を締めくくる千葉雅也「死を知る動物——ジル・ドゥルーズの生成変化論における全体性の問題」は、拙稿とは別の仕方でも横山論文を引き継ぎつつ、ドゥルーズのエクリチュールの具体的な読解を通して「感覚の政治学」とも呼ぶべき問題系を浮かび上がらせる。「存在」という包摂のカテゴリーからの逃走として通常は位置づけられるドゥルーズの生成変化論から、千葉は、まずはバディウを導き手として、そこにおいてなお超越化と全体化の傾向を読み取る。しかし、千葉の読解はその地点にはとどまらず、さらに、バディウによるドゥルーズ解釈の裏側に潜む契機をたぐり寄せるだろう。それは、個々の生成変化、個々の情動がそれぞれの世界のうちに閉じ、複数性のうちに留まりながら行使される、より激化したファシズムなのである。

身体から感覚というこの展開は、確かに身体の問題の現代的局面を捉えているに違いない。以上の私たちの論考から、身体の哲学へのささやかな寄与にとどまらず、身体の哲学を超えていく可能性をも読み取ってもらえれば望外の幸せである。最後に、この研究会を可能にした UTCP、ワークショップで有益なコメントを下された先生方、及び論集としてまとめるにあたって審査を担当してくださった先生方に謝意を表したい。

註

¹ 研究活動の詳細については本論集末尾の活動記録を参照せよ。

² なお、研究会においては、これら両者の異なる立場からの生態心理学批判に対して、染谷昌義が生態心理学の立場からの再批判を展開した。残念ながら、今回その成果を本論集に収録できなかったが、染谷の立場に関しては以下の論文を参照されたい。染谷昌義「知覚は誤らない(上)——認識へのエコロジカル・アプローチと知覚の倫理学」『思想』第970号(2005年):42-67;「知覚は誤らない(下)——認識へのエコロジカル・アプローチと知覚の倫理学」『思想』第972号掲載予定。

³ 研究会およびワークショップでは平倉圭もこの問題意識を共有する論考を発表した(活動記録参照)。その成果はまだ論文のかたちではまとまっていないが、関連する研究として平倉圭「ゴダールの連結と『正しさ』の問題」『表象文化論研究』第3号(2004年):94-114を挙げておく。